

Cure to Care

第 2 話

與儀 達朗

【登場人物】第2話

町田 翼（32）：救急医

鈴木 舞（30）：訪問看護師

村井 正和（50）：訪問診療所院長

五十嵐 隼人（28）：訪問診療所アシスタ

ント

金城 恵（36）：訪問診療所アシスタント

鈴木 健（52）：外科部長

八木 直久（50）：救命センター部長

新井 亮（29）：町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）：救命センター看護師

黒田 直哉（55）：在宅患者

佐々木 ツル（85）（80）：在宅患者

岡田 三郎（80）：在宅患者

岡田 明子（50）：岡田の娘

山田（29）：町田の後輩の救急医

島崎（30）：町田の後輩の救急医

青山（40）：岡田のケアマネ

救急隊員（22）：救急隊員

杉本（60）：定食屋の店主

野崎（60）：バーの店主

佐々木長蔵（85）：佐々木ツルの旦那

受付看護師（45）：伊祖療養病院看護師

若い女性（33）：黒田の死別した妻

学童期の女兒（8）：黒田の死別した娘

医師A（26）：救命救急センター研修医

看護師A（24）：救命救急センター看護師

看護師B（23）：集中治療室看護師

医師B（26）：集中治療室研修医

【あらすじ】（第二話）

街で訪問看護師をしている舞と出会った町田は、訪問診療所の連絡先を渡され、訪問診療所の村井院長の診療に同行することにした。

同行先で、身体的制限や自らの人生観を持ち、訪問診療を受けている患者たちと出会う。今まで病院で経験した治療と異なるオーダーメイドの治療を施す村井の考えや患者の村井への信頼に心が動かされていく。

「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」という舞の言葉を改めて思い出し、患者の人生にとって最善の医療を自身も提供したいと思い、訪問診療の道に進むことを考え始める町田。自身の考えを八木部長に告げるが、八木に「訪問診療に町田が活かせること」を問われた際、答えが出ず、八木からは慰留される。

そんな中、間質性肺炎を患う村井の在宅患者である岡田三郎が救急外来に搬送されてく

る。診療同行で村井と患者、家族との急変時の面談を見ていた町田は、実際の救急外来で救急医の負担軽減に繋がっていることを実感する。

今まで後輩たちと心身をすり減らしながら救急外来業務にあたっていた自分だからこそ、医療難民の主治医として救急搬送を防いだり、事前の治療方針の構築により、新井たち後輩の負担を軽減したいという思いは強く、そのために今まで学んできたスキルを活かしたいと八木に伝えるのだった。

第2話 「決意」

（回想はじめ 第一話）

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田翼（32）。若干躊躇しながらも右手で呼び鈴を鳴らす。

玄関が開く。村井正和（50）が立っている。

町田「はじめまして、診療見学に来た町田と申します」

村井「院長の村井です。話は聞いています、どうぞ」

町田が診療所に入り、ドアが閉まる。

（回想終わり）

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

オフィスには長テーブルがありデスクの前で作業している五十嵐隼人（28）と金城恵（36）の姿がある。

村井「今日診療同行に来てくれた町田先生です」

町田「よろしくお願いします」

会釈する町田。

村井「看護師さんの金城さんと救命士の五十

嵐くん、二人はうちの診療アシスタント」

二人を紹介する村井。

金城「町田先生、よろしく」

五十嵐「五十嵐です、よろしくお願いします」

村井「町田先生はそこに座ってね」

町田に空いている椅子を指し示す村井。

町田「ありがとうございます」

やや緊張の面持ちで椅子に座る町田。

村井も自身の椅子に腰掛ける。

村井「早速だけど、はじめていきましよう。

昨日の夜の往診はゼロでした、今日の訪問

ルートだけど五十嵐くん教えてくれる？」

T「往診…患者や家族からの臨時の要請を受けて行われる臨時の診療」

五十嵐「はい、今日は黒田さん宅からはじま

って……」

五十嵐の説明に耳を傾けている村井、金

城、町田の三人。五十嵐の説明が終わる。

村井「ありがとう。今日も一日よろしく願
いします。」

○村井訪問診療所・倉庫（朝）

診療バッグに点滴類や吸引チューブ、
カテーテルなどを詰めている金城。

町田が後ろに立って見ている。

町田「結構、持っていくの多いんですね」

金城「いろんな事情で家から出れない患者さ
んたちだから：：自宅で医療を提供するっ
てなると、物品多くなるのよね。病院には
及ばないけど点滴もできるのよ」

町田に薬剤の入ったボックスを見せる

金城。アドレナリンなどの緊急薬剤が
そこには入っている。

町田「結構揃っていますね」

町田の後ろから村井が声をかける。

村井「先生が救急外来で使う薬もあるんじや
ない？」

町田が点滴類の中から、マンニトールの点滴の袋を見つけて手に取る。

町田「こんなものもあるんですね」

金城「院長、こんな脳ヘルニアの患者にしか使わないですよ、必要ありますか？」

村井「まあまあ、在宅といっても何が起こるか分からないだろう？」

村井が笑って誤魔化している。

準備を終えた金城に視線を向ける村井。

村井「金城さんそろそろ出発する？」

金城「そうですね」

村井「町田先生、いこうか」

○村井訪問診療所・玄関（朝）

玄関のドアを開ける村井。後ろで靴を履き替えている町田。

村井「行ってきます」

○車内・後部座席（朝）

運転している金城。後部座席に横並び

で座っている町田と村井。

村井「町田先生は、前田救命センターの救急医だって？」

町田「そうです」

やや緊張気味で表情が硬い町田。

村井「今回の見学って誰かからの紹介？」

優しそうな表情で町田を見る。

町田「あ、訪問看護師の鈴木さんから……」

村井「ああ、鈴木さんね」

腑に落ちた表情でうなづく村井。

金城「舞ちゃんが、町田先生はいろいろある

からとか言って……」

村井が軽く笑いながら町田を見る。

村井「いろいろあるの？」

町田「まあいろいろです」

町田は苦笑いを浮かべている。

○黒田宅・玄関前（朝）

一軒家の前に立っている町田、村井、

金城の三人。表札には黒田と書かれて

いる。インターホンを鳴らす村井。

村井「おはようございます、村井訪問診療所
です」

黒田直哉（55）（声）「どうぞ」

玄関を開けて中へ入る三人。

○黒田宅・玄関（朝）

玄関にはやや幅の広い木製のスロープ
が取り付けられている。奥から車椅子
を自走して玄関に現れる黒田。

黒田「村井先生よろしくね、新人？」

町田を見て軽く会釈する黒田。

村井「ああ、黒田さん。診療見学にきている

町田先生です」

手のひらを上に向けて町田を指し示す。

町田「町田と言います、よろしくお願いま
す」

軽くおじきをする町田。

黒田「まあ上がって」

町田、村井、金城は靴を脱ぎ玄関を

あがる。

○黒田宅・居間（朝）

血圧計を巻いて、車椅子に座っている
黒田の血圧測定をしている金城。座る
ことで黒田と同じ目線になる村井。

村井「黒田さん、最近調子どうですか？」

黒田「絶好調よ、おかげさまで」

村井「それはよかったです。おしっこの管の
管理とかも大丈夫ですか？」

黒田「大丈夫」

立ちながら二人の話を聞いている。ふ
と居間に置かれている仏壇、置いてあ
る写真が目に入る町田。写真には若い
女性（33）と学童期の女兒（8）が
写っている。町田の視線に気づく黒田。

黒田「気になるか？」

町田「あ、いえ、すみません……」

黒田「交通事故でな、嫁と娘亡くしたんだわ」

金城「黒田さん……」

バッグに血圧計を戻そうとしていた金城の手が止まり、心配そうな表情で黒田を見ている。

黒田「大丈夫よ、金城さん」

自分の足を見る黒田。

黒田「俺は生き延びたが、下半身動かなくなっ
ってな」

静かに聞いている町田。

黒田「退院してこの家戻ったけど、俺には何もねえんだわ。俺は俺でおしっこの感染や床ずれで具合は悪くなって病院行って戻っての繰り返しよ。惨めだろ？」

金城「最初は頑張って病院に通おうとしていたんだけどね、通院って大変なのよね。次第に足取りが遠のいて……」

黒田「そんで見かねた当時の主治医が、紹介してくれたんよ」

村井の方を見る黒田。

黒田「今は村井先生が来てくれるし、仮に具合が悪くなっても、まずは家で治療してく

れる。本当助かっている」

黒田「具合悪くなって助けられたことは数え切れない。村井先生にだったら命預けられるよ」

真剣な表情の黒田。

村井が黒田の肩を叩く。

村井「それが私たちの仕事ですから。黒田さんお薬出しときますね、いつも通り薬剤師さんが届けに来てくれると思います」

黒田「いつもありがとうな、先生」

黒田と村井のやりとりを見ている町田。

○黒田宅・玄関前（朝）

村井「お邪魔しました」

軽く頭を下げ、玄関の扉を閉めて、停めていた車の方に歩き出す村井、金城、町田の三人。車に乗り込む。

○車内・後部座席（朝）

後部座席に座っている村井と町田の二

人。

村井 「次の患者さんって……佐々木さんか」

金城 「そうですね」

運転しながらちらっとバッグミラーで

後ろを見る金城。

町田 「どんな患者さんなんですか？」

村井 「病院が嫌いなおばあちゃん」

町田の方に目をやる村井。

町田 「病院が嫌い？」

金城 「そう」

○集合住宅 A 棟・正面（朝）

集合住宅の前でノートパソコンを

開いていた村井がパソコンを閉じる。

集合住宅の一階の階段を上がっていく

村井、金城。後に続く町田。

○集合住宅 A 棟・401号室玄関前（朝）

表札の401号室の1の字が消えて、

40の二数字になっている。インター

ホンを押す村井。

村井「村井訪問診療所です、佐々木さん」

応答はない。ドアノブを捻る村井。

鍵がかかっておらず、そのままドアを

開けて入る村井。後に続く金城。恐る

恐る二人に続いて町田が入る。

金城「失礼します」

居間に入っていく村井、金城、町田の

三人。

○401号室・居間（朝）

今の流し台で前屈みになっている佐々

木ツル（85）がいる。駆け寄る金城。

金城「ツルさん、大丈夫ですか？」

佐々木「大丈夫よ、ちょっと頭が痛くてね」

村井も駆け寄る。

村井「佐々木さん、横になりましたよるか」

金城と一緒に脇を抱えながら、居間の

ベッドまで佐々木を移動して、枕を高

くして寝かせる。

村井「佐々木さん、血圧とか測りましょう」

金城がバッグから血圧計や酸素飽和度を測る機械を取り出す。

村井「頭痛のほかに症状ありますか？」

佐々木「ないよ……」

金城「収縮期血圧180です」

うなづく村井。

村井「金城さん、エコー用意しといて」

金城「わかりました」

佐々木「血圧高い？」

村井「今日は少し血圧が高いみたいです。そのせいですかね、念のために超音波検査もさせていただきます」

村井にエコーを手渡す金城。村井は

佐々木の上着をめくり、エコーを胸にあてる。

村井「ちょっとひんやりしますよ、佐々木さん」

慣れた手つきでエコーを操作する村井。

町田「救急外来みたいですね」

村井「病院ほどではないけど、在宅でできる

検査もあるんだ」

村井はエコーを終わり、佐々木の胸に

ついたゼリーを拭き、続いてペンライ

トの光で瞳孔をチェックする。

村井「佐々木さん、血管や心臓の病気ではな

さそうです」

ややほっとしたような表情で息をつく

佐々木。

村井「血圧が高いことが原因ですかね。」

町田「高血圧性脳症……」

村井が町田を横目にうなづく。

村井「佐々木さん、本来であれば血圧の管理

のために、入院して点滴などのお薬が必要

かもしれません」

ベッドに横になっている佐々木が村井

を見る。

佐々木「入院、点滴？ 嫌です！」

苦笑する村井。

村井「というと思っていました、金城さん」

金城「はい」

金城がバッグから湿布薬を取り出し、
村井に手渡す。

村井「佐々木さん、これは血圧を下げる湿布
ですよ。一日一回ここに貼るだけでいいで
す。頭痛は良くなると思いますよ」

佐々木が村井に渡された湿布を見るが
湿布をベッドの外に投げてしまう。

佐々木「いらんよ、薬は」

町田が何かを言いたげな表情をして、
佐々木を見ている。村井はにっこり笑
って佐々木を見る。

村井「わかりました、佐々木さん。でも症状
がきつかったら貼ったほうがいいですよ」

佐々木「……」

佐々木は起き上がり、床に落ちてある
湿布を拾う。村井が金城の方をみる。

金城「佐々木さん、お邪魔しました」

村井と金城が片付けをして、立ち上が
り玄関へ向かう。町田は腑に落ちない

表情で布団をかぶって寝ている佐々木
を見る。

○集合住宅A棟・外観（昼）

村井、金城、町田が停めてあった車に
乗り込む。集合住宅前の花壇にシオン
が植えられている。

○車内・後部座席

村井「あ、金城さんそろそろお昼ですね」

金城「そうですね、先生なんか希望あります
か？」

町田の方をみる村井。

村井「町田先生、何か希望ある？」

町田「希望ですか？」

町田が不思議そうな顔をしている。

村井「あ、昼飯だよ。ごめんね」

町田「あ、何でも大丈夫ですよ」

村井「金城さん、杉本さんのところで」

金城「わかりました」

エンジンをかけ出発する車。

○車内・後部座席

金城が車を運転している。

村井「町田先生、先生ならさっきの佐々木さんみたいな患者さんどうする？」

少し数秒考える町田。

町田「ルートをとって降圧薬を投与します。血圧のモニタリングが必要なので、動脈ライン取って集中治療室に入室も考えますかね」

村井「先生、さすが救急医って感じだね」

村井が数秒、間を置いて話し始める。

村井「佐々木さんはね、昔認知症の旦那さんと二人暮らしだったんだよ、子供さんはいらっしゃらないんだけどね」

村井「佐々木さんは持病も抱えながら、外来通院していて、旦那さんの介護もしていた」

町田「大変ですね……」

村井「ある日、状態が悪くて佐々木さんは病

院に運ばれて、心不全で入院することになったんだ」

村井「佐々木さんは自宅に旦那さんも居るからって早期退院を望んで、主治医の先生も頑張ってくれて数日で退院できた」

町田「本人の希望通りになったってことですか？」

村井「でも物事はそう綺麗にはいなくてね」

町田「……」

運転している金城がバックミラーで後部座席の町田と村井を見る。

数秒間の沈黙が流れる。

金城「佐々木さんの閉まっておいた薬を旦那さんが間違って飲んでしまったの」

村井「皮肉にも自身の退院日に旦那さんが救急搬送されてきてね」

町田が何とも言えない表情で村井を見る。

村井「旦那さんは懸命な処置にも関わらず、残念ながら亡くなってしまったんだ」

金城「佐々木さん、相当自分を責めてね」

○401号室・居間

ベッドに横になり、ちょうど5年前の日付が印字された一枚の写真を見ている。二人の夫婦が笑っている。当時の佐々木長蔵（85）と佐々木ツル（80）

○車内・後部座席

村井「佐々木さんは、それから薬や病院とかいう言葉に過敏になってね……医療に対する拒否感が強いんだよ」

金城「ケアマネから私たちが紹介された最初の時なんて家に上がらせてもらえなかったですもんね」

町田「そうだったんですね……」

村井「町田先生、病院では患者さんに対して医学的にベストな治療が望ましいと思う」

村井「ただ、訪問診療っていうのは彼らの人

生や生活とも向き合わないといけないから、
医学的にベストとは必ずしも言えない。で
もそれが患者にとって大切なこともある」

町田「村井先生……」

村井「まあ難しいよね」

村井「救急医だと初めましての患者が多いか
らそういう経験は少ないと思うけど、医者
として患者の生活や人生を考えるってこと
も大切だと俺は思う」

町田「患者の人生で医療を決める……ってこと
ですよね？」

村井「良い言葉じゃない、町田先生」

町田の左肩を優しく叩く村井。

町田が少し恥ずかしそうな表情をして
軽く頷いている。

○定食屋・玄関

定食屋の正面扉を開け、中にはいる村
井、金城、町田の三人。

○定食屋・店内

空席のテーブルを見つけて、座る村井、
金城、町田の三人。定食屋の店主の杉
本（60）がメニュー表を持って近づ
いてくる。

杉本「村井先生、いつもありがとうございます」

村井をみる町田。

町田「先生の知り合いですか？」

町田は小声で村井に囁く。

村井「僕の患者さんの息子さん」

町田「そうなんです」

腑に落ちたようにうなづく町田。

杉本「お袋がいつも世話になってな、ありが

とうね先生。いつもの？」

村井「ああいつもの」

村井は杉本からメニュー表を受けとり、
金城と町田に渡す。

○定食屋・店内

町田、村井、金城に注文した料理が提

供されており、三人は食事をしている。

町田の食べるスピードにやや驚きの表情を浮かべている村井。

村井「町田先生、食べるの早いなだね」

町田「救急やっているといつ癖で……」

少し恥ずかしそうな表情を浮かべる町田。

金城「忙しいもんね、訪問診療だと昼は外食がほとんどね、先生」

村井「そうだね。町田先生の今の職場って前

田救命センターだよね？」

町田「そうですね」

村井「救急だと八木先生のところか……」

町田「村井先生、うちの部長ご存知なんですか？」

右親指の付け根の縫合跡の傷を村井は左手で隠す。

村井「八木先生は……大学の同期だよ」

ちょうど電話が掛ってきてポケットからスマホを村井は取り出す。画面には

『五十嵐』と表記されている。

村井「ちよつとごめんね」

スマホを片手に扉を開けて外に出ている村井。

○定食屋・玄関

スマホを耳に当てる村井。

村井「もしもし、五十嵐くん」

五十嵐（声）「先生、お疲れ様です。訪問看護から連絡あって、岡田三郎さんが熱発してて、往診の依頼がありました」

村井「わかった、ここからだと二十分後くらいには着けるかな」

電話を切り、村井は扉を開けて店内に戻る。

○定食屋・店内

扉を開けて村井が入ってくる。

金城「先生、どうかしました？」

村井「三郎さんが熱出したみたいで往診依頼

があつてね。行こうか」

席を立つ町田、金城、村井の三人。

○定食屋・レジ

村井「杉本さん、ご馳走様でした」

村井は杉本にお金を渡す。

杉本「まいど。相変わらず忙しいのね」

苦笑いを浮かべる村井。

杉本「ちよつと待ってな」

杉本が暖簾をくぐり奥の厨房に

入っていき、右手に袋を下げて

レジへ戻ってくる。

杉本「これうちのところで取れたやつ」

村井に手渡す杉本。袋の中には数個の

梨が入っている。

村井「すいません、杉本さん」

杉本「気にしないで、いつも世話になっている

し」

軽く会釈して出口へむかう村井。

○岡田宅・玄関

村井が玄関のインターホンを押す。玄関の扉を開けて出てくる岡田明子（50）。

明子「先生、すいません忙しいのに」

村井「いえいえ：お父さんの様子は？」

明子「一昨日から熱が出て全然下がらないんで、今日訪問看護師さんにきてもらったんです」

○岡田宅・寝室

寝室に入っていく村井、金城、町田の三人。寝室にはカラオケを歌っている岡田三郎（80）や孫と笑っている写真が飾られている。寝室では、岡田がややぐったりして寝ている。在宅酸素の機器が横に置いてあり、岡田の鼻には酸素のカニユレがついている。酸素飽和度を測っている鈴木舞（30）。

明子「症状は鼻水と軽度の咳くらいだったん

ですが……」

舞「今日から喀痰に色がついてきているのと
酸素の値がいつもより少し下がっていたの
で肺炎が心配で……」

舞の話聞いている村井。舞の話が終
わり、聴診器を持ってベッドサイドに
座る。

岡田「先生、すまんね」

村井「大丈夫ですよ、岡田さん」

岡田の聴診を行っている村井。

村井「気管支炎か軽度の肺炎かもしれませ
んね」

寝室の扉の前に立っている町田の方を
振り返る。

村井「町田先生が主治医なら、どうする？岡
田さんは間質性肺炎を患っている」

いきなりの質問を振られて驚く町田。
町田「そうですね……飲み薬か点滴で抗生物
質を使いますかね。ただ悪くなった時の治
療も話し合っておくべきかと思います」

町田の回答にうなづく村井。舞も

頷いて町田の方を見る。

村井「私も町田先生の意見と同じかな」

村井「金城さん、娘さん呼んできてもらえ
る？」

金城が一時外していた娘を連れてくる。

村井が岡田の方をみる。

村井「岡田さんは気管支炎か軽い肺炎だと思
います。抗生物質は飲めそうですか？」

岡田「飲めるよ……」

村井「わかりました。ただ、岡田さんは間質
性肺炎という肺の組織が硬くなって変形す
る病気をお持ちです。今回のような感染で
悪くなるかもしれません。」

静かに村井の話を受けている岡田。

村井「抗生物質の治療でも悪くなったら、間
質性肺炎が悪くなっている可能性が否定
できません。その時は病院に行くのもひ
とつの選択肢だとは思っています」

村井「これから話す内容は、一部厳しい話も

ありますが、大丈夫ですか？」

うなづく岡田と明子。

○岡田宅・玄関

村井「どうもお邪魔しました」

金城「お大事になさってください」

明子「本当先生に来てもらって良かったです」

玄関先で深々と頭を下げる明子。

村井「いえいえ、また何かあったらいつでも

連絡してくれたら大丈夫ですよ。失礼しま

すね」

何か心を揺さぶられた表情をしている

町田は、明子に軽く会釈して村井、金

城の後について車へ戻る。

○村井訪問診療所・玄関（夕）

玄関の扉を開ける村井。村井は靴を脱

いでオフィスに向かう。金城と町田が

続いて入っていく。

○村井訪問診療所・オフィス（夕）

金城「ただいま」

金城が五十嵐に声をかけながら、席に着く。作業中の手を止めて顔をあげて

村井、金城、町田の方をみる五十嵐。

五十嵐「お疲れ様でした」

村井「町田先生、今日の同行はこれで終わり
だけどうだった？」

町田「訪問診療の現場をはじめて経験させて
もらい新鮮でした。患者の人生や生活を考
える医療も良くなって思いました」

軽く一礼して、町田は玄関に向かう。

○村井訪問診療所・玄関

玄関まで見送りに来る村井。

外履きに履き替えた町田が、村井を見
る。

町田「実は最近、救急搬送されてくる医療
難民の患者さん、事前に治療コードが話
されていたらなって思う患者が多くて」

町田「この前なんて苦渋の決断で人工呼吸器をつけたんですけど、家族からは望んでなかったって言われて……」

村井が何かを思い出しているような表情で、町田の話の話を聞いている。

町田「彼らが人生や生活を考えてくれる村井先生に診てもらえていたら幸せだったんじゃないかって……。すいません、変なこと言ってます……」

町田「失礼します」

町田が軽く会釈して玄関の扉に手をかける。

村井「町田先生」

町田が村井の方を振り返る。

村井「先生にそういう思いがあるのなら、俺じゃなくてもいいんじゃないの？」

村井「また来たくなったらおいで」

町田が村井の方に会釈して、扉を開けて外に出ていく。

○町田自宅・居間（夜）

座って缶ビールを飲んでいる町田。
散らかっていた部屋は整理されてお
り、机の上には何も置かれていない。

○（回想はじめ 第一話）居酒屋（夜）

舞「医療が患者の人生を決める世界が当たり
前だったと思うけど、今度は彼らの人生で
医療を決めてみない？」

（回想終わり）

○町田自宅・居間（夜）

立ち上がり棚からサークル時代の寄せ
書きの色紙を手取る町田。舞からの
メッセージが目止まる。「患者さん
の幸せを考えられるお医者さんになっ
てね 鈴木舞」と書かれている。何か
を決心したように前を向く町田。

○前田救命センター・外観（朝）

「前田救命センター」の看板が病院の壁に掲げられている。

○同・医師控室（朝）

クラツカーの音が鳴り、テープが顔にかかる町田。

新井「町田先輩、復帰おめでとうございまーす」

笑顔で町田と肩を組む新井亮（29）。山田（29）と島崎（30）も手にクラツカーをもって町田を見ている。島崎は冷静な表情を浮かべている。

島崎「先輩、おかえりなさい」

山田「お久しぶりです」

ちよつと恥ずかしそうな表情を浮かべる町田。

町田「お前ら、やりすぎだよ」

新井の頭を抱える町田。

町田「ちよつと俺部長に話があるから」

町田は医師控室を出ていく。

新井「先輩つれないな」

島崎「町田先輩、ただの有給明けでしょ」

空のクラツカーを新井の手に握らせて

島崎も医師控室を出ていく。

山田「俺は良かったと思うよ」

新井の肩を叩き、島崎の後を追い

医師控室を山田が出ていく。

○同・部長室

八木が椅子に座っている、机を挟んで

目の前に立っている町田。

八木「休暇どうだった、休めたか？」

町田「おかげさまで。ありがとうございます

た」

町田「部長、実は今後、進みたい道があつて」

八木「おお、見つけたのか？」

町田「この休暇中、実は訪問診療所の同行に

行ってきました。村井訪問診療所です。村

井院長は先生の同期とか」

微笑んだ八木の表情が真顔に変わる。

八木「おお村井か。なんでまた訪問診療の見学に？」

町田「大学の同期から見学を勧められて」

八木「なるほどね」

町田「通院できない患者さんの人生や生活を
考えて医療を提供して、治療コードを決め
ている村井先生の姿を見て……。自分も村
井先生のようになりたいと思って」

机の上で手を組んで町田の話を聞いて
いる八木。

八木「とりあえず、良い経験をしたんだね」
数秒ほど下を向いて考えて八木は顔を
上げて町田を見つめる。

八木「先生の気持ちはわかったけど、なんか
足りないんだよね」

予想してなかった八木の言葉に戸惑う

町田。

八木「今八年目だったよね」

町田「はい」

八木「この八年間で本当に成長してきたよ。
ただその裏側には、沢山の指導医や医療ス
タッフが町田を救急医として一人前にする
べく、かけてきた時間と愛情がある」

町田が静かに八木の話を聞いている。

八木が机の上に飾ってある車のミニチ
ュアを手取る。

八木「今の理由なら、俺から言わしてもらっ
たら、長年の愛車がある日突然、見た目だ
けで乗り替えられた感覚だよ」

八木「まあ、そんなこと言っても俺に止める
権利はないけどな……。けどな、俺は次に町
田が乗る車はオーダーメイドであってほし
いんだ」

町田「どういう意味ですか？」

八木「救急医の町田としての経験や思いを、
訪問診療でどう活かせる？」

町田「それは……」

八木の言葉を聞いて軽く下を俯く町田。

○岡田宅・寝室

岡田のケアマネの青山（40）が寝室に入ってくる。

青山「岡田さん、大丈夫ですか？」

岡田「青山さん、酸素をあげても苦しくて」

青山が在宅酸素の機器に目をやると、通常の酸素投与量より数段階上がっている。青山が焦った表情でスマホを取り出し誰かに電話をかけはじめる。

○前田救命救急センター・ステーション（昼）

町田がスクラブのポケットに手をつ

込んで何かを考えながら歩いてくる。

町田を見て、駆け寄ってくる新井。

新井「先輩、ちょっと手貸してもらっていいですか？」

町田「おお、どうした？」

新井「今から呼吸不全で救急搬送されてくる患者なんですけど……」

新井の持っている患者情報が記されて

いるボードを手にとる。記載されている内容を見て町田の表情が変わる。

町田「岡田三郎……かかりつけなんか言っただ？」

新井「えっと、村なんとか診療所だっけ」

町田「村井訪問診療所？」

新井「あ、それです！」

すぐ後ろで点滴を準備していた高井玲奈（30）だが、村井訪問診療所という言葉に反応する。

○同・初療室（昼）

救急隊員（22）が岡田を運んでくる。初療室のベッドに移しかえられる岡田。看護師A（24）がモニターを装着している。医師A（26）が患者に酸素マスクの付け替えを行なっている。新井が挿管の準備をし始める。

町田「新井、それは必要ない」

新井「え？」

新井「先輩？」

町田の発言に驚いている新井。

○（回想はじめ）岡田宅・寝室（昼）

村井「これから話す内容は、一部厳しい話もありますが、大丈夫ですか？」

うなづく岡田と明子。

村井「岡田さんの間質性肺炎が一旦悪くなると、重度の酸欠状態になり命が危なくなります。命を救うためには人工呼吸器が必要な状態になるかもしれません。」

一呼吸おいて続ける村井。

村井「ただ人工呼吸器を着けたからといって岡田さんの間質性肺炎を治すことはできません。あくまで呼吸をサポートする機械なんです」

静かに村井の話聞いている岡田と明子。

村井「仮に人工呼吸器をつけた場合、元の正常な肺が少ない事に加え、集中治療で筋力

も落ちていく岡田さんは、その先の人生を人工呼吸器無しで生きていくことができなくなるかもしれません」

明子「管に繋がられたままってことですか？」

村井「残念ながらそうです」

岡田「それは嫌だ」

明子「お父さん……」

村井「岡田さんの人生の生きがいは何ですか？」

岡田「俺はカラオケや明子や孫と話をするのが生きがいだよ。もうそれができなくなるのだったらそんなの生きている意味がない……」

涙ぐむ明子。

岡田「村井先生、俺がもうダメそうだったら、せめて苦しさをとってくれ。頼むわ」

優しく岡田の手を取り頷く村井。

（回想終わり）

○同・初療室

町田「新井、ハイフロ―装着して、レントゲン取ろう。治療を進めていくけどもたなかつたら、岡田さんの呼吸苦をとる治療をしてあげよう」

新井が驚きつつも力強い表情の町田の方針を聞いている。

○同・面談室

明子が椅子に座っている。町田が扉を開けて入ってくる。立ち上がる明子。

町田「救急医の町田です」

町田の姿を見て、少し驚く明子。

明子「先生、父は？」

町田「幸い、人工呼吸器ではないサポートをつけて落ち着いています。しばらく入院は必要になると思いますが……」

明子「本当にありがとうございます」

明子が深々と頭を下げる。

町田「いえいえ、こういうことまで予想して治療方針を事前に話し合ってくれた村井

先生のおかげですよ」

明子「そういえば、先生救急医だったんです

ね」

村井「はい。救急医としても村井先生には本
当感謝しています」

面談室の外で、扉の前に立って町田と
明子の会話を八木が聞いている。

○同・初療室前

町田が面談室から歩いて初療室に戻っ
てくる。新井が駆け寄ってくる。

新井「先輩、患者さんの治療方針決まってい
ませんでした？」

町田が新井に対して微笑みながら頷
き、新井の肩を叩く。

新井「え、どういうことですか？」

新井が腑に落ちない表情で町田を見
る。目の前から八木が歩いてくる。

町田「部長」

声をかけられ町田の目をみる八木。

八木「どうした？」

町田「俺、やっぱり訪問診療の道に進もうと
思います」

新井「訪問診療？」

横にいた新井が町田をみて驚いている。

町田「俺は救急医として、新井たち後輩と、
医療難民の方、治療コードが決まっていな
い搬送患者と向き合ってきました」

町田「俺が主治医だったら、もっと何かでき
たかもしれないと……正直悔しかったです」

町田「確かにかかりつけの患者さんの治療コ
ードの問題はすぐには解決しないかもしれ
ません」

町田「でも訪問診療に進んで一人でもそうい
う患者さんを減らして、新井たち後輩の負
担を取ってやりたい」

八木「今の町田先生に、それができるってこ
と？」

町田「もちろん勉強が足りない分野もありま
すが、育ててもらったスキルと抱えてきた

思いは、必ず役に立つと思います」

町田「次の車でもエンジンを変えるつもりは
ありません」

八木「そうか」

八木が頷いて、町田の横にいる新井を
見る。

八木「新井、送別会だな」

八木は町田に背を向けて去っていく。

八木の表情には寂しさと笑顔が入り混
じっている。

新井「そんな、先輩どうしてですか？」

町田「新井たち後輩のために、俺が出した結
論だよ」

新井は町田の目の奥に宿る強い意志を
感じ取る。

○村井訪問診療所・オフィス（夜）

椅子に座って引き出しから一枚の写真
を取り出し見ている村井。スマホの着
信が鳴る。電話に出る村井。

○バー・カウンター（夜）

八木がノンアルコールカクテルを飲んで
いる。隣に座る村井。

村井「呼び出すなんて珍しいじゃないか」

バーの店主の野崎（60）が村井に声
を掛ける。

野崎「お客さん、何になさいますか？」

村井「同じやつでお願いします」

八木「飲まなくなったの？」

村井「ほぼ毎日オンコールなんだよ」

八木「お互い忙しいな」

野崎「どうぞ」

野崎がノンアルコールカクテルを

村井の目の前に置く。

村井がカクテルを一口飲む。

八木「うちの町田が世話になったって？」

村井「いやいや、同行してくれたただだよ」

八木「あいつ、訪問診療に進みたいんだって。」

村井の診療見て、何か感じたらしい」

村井「俺の？」

軽く笑い、カクテルを飲む村井。

八木「あの時、村井が言っていたケンさんの

言葉を思い出したよ……」

カクテルを飲んでいた村井の表情が、

一瞬曇る。

八木「町田は救急医として優秀だ、本当は手

放したくない。だが村井になら預けられる」

村井の顔を真剣な表情で見つめる八木。

しばらく考えている村井。

村井「ああ、わかった。ただあの時の俺の経

験はさせたくない」

八木「そうだな」

村井が八木の顔を見る。

村井「最近どう？」

八木「変わらず働いているよ」

村井「そうか……」

カウンターで喋りながらノンアルコール

ルカクテルを飲む八木と村井。

○居酒屋・団体席（夜）

新井が涙を浮かべながら、ビールのジョッキを手にとって立ち上がる。八木、島崎、山田、医師A、看護師A、医師B（26）、看護師B（23）らが座っている。中央に座っている町田。

新井「このたび、町田先輩は新たな道に進むことになりました……」

咽び泣きはじめる新井。新井に目をやる苦笑いの町田。八木がグラスを持って立ち上がる。

八木「町田先生の新たな門出に乾杯！」

一同が乾杯をしてグラスに口をつける。盛り上がっている一同。島崎が花束、山田が寄せ書きを持ってくる。

島崎「先輩、いろいろと教えてくれてありがとうございます。先輩の活躍を祈っています。正直寂しいです」

涙を浮かべている島崎。

山田「僕らが戻ってきてすぐ居なくなるなん

て……もっと一緒に働きたかったです」

町田「ごめんね。でもこれからも後輩のために仕事するのは変わらないよ。ありがとう」

島崎と山田から寄せ書きと花束をもら

う町田。目を真っ赤にした新井が町田に抱きついてくる。

町田「新井、やめろよ」

新井「まだ間に合います、先輩嘘って言ってください」

新井を半ば強引に、引き剥がす町田。

町田「ちょっとトイレ」

町田が暖簾をくぐって外に出ていく。

島崎「あ、そういえば高井さんは？」

山田「確かに……」

一升瓶を机の上に置く新井。

新井「高井さんは今日夜勤じゃない、でも居ない。絶対男だ……」

一升瓶のお酒を注いで飲んで咽び泣く

新井。新井の姿をみて呆れる島崎。

島崎「あんた、本当きもい」

ノンアルコールビールを飲みながら静かに新井と島崎のやりとりを静かに八木が見ている。

○伊祖療養病院・受付（夜）

受付の扉が開いてやや小走りで走ってくる高井。受付看護師（45）が座っている。

高井「すみません、面会時間ギリギリで」

受付看護師「高井さん、大丈夫よ」

頭を下げる高井。

○伊祖療養病院・病室（夜）

高井が病室の扉を開ける。

病室には人工呼吸器があり、軽度のリク音が鳴っている。高井の前にはベッドに横になっている患者がいるが、高井の後ろ姿で患者の姿は見えない。

（第三話「人生会議」に続く）

